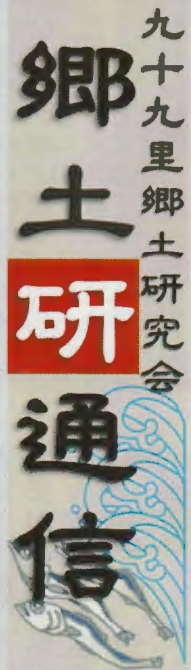


「私と郷土史」を講演する本保先生

去る令和三年三月十四日(日)、千葉市内の病院にてお亡くなりになりました。ここに会員一同謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

### 郷土研究会の恩人 本保弘文先生 急逝す



第13号

会長 内山いつ  
事務局長 加藤隆雄

事務所 九十九里町 真亀4294  
電話76-3226

会員数53名  
令和4年3月現在

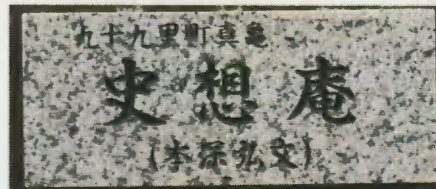
平成22年4月17日創立

は本会の目玉である会報『伊和志』と「郷土研通信」の発刊・発行を本保先生と共に車の両輪のごとく活動されてきた本会会長内山いつ氏の寄稿を紹介します。

### 「本保弘文先生を偲んで」 内山いつ

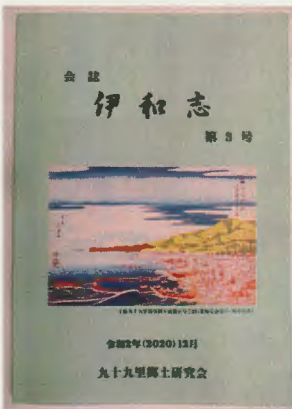
元中学校の社会科の教師で、管理職以前は部活動の顧問をされていたようです。その当時本町の九十九里中学校の卓球部は県下でも有名な強豪校で関東大会・全国大会に出場して優勝していました。本保先生も卓球の顧問をされていたそうです。先生は九十九里中学校に練習試合を申し込み、生徒を引率してきました。

民宿にその都度宿泊させるよ



りは別荘を建ててそこで生徒の面倒を見た方が良いと考えたそうです。その別荘が真亀納屋に現存している「史想庵」です。また、歴史研究家でもある先生は、徳川家康の「御成街道」について、数々のご著作を著しています。さらに高村光太郎の研究家でもありました。そこで別荘は九十九里浜の「智恵子抄」詩碑が建っている近辺にと決められたそうです。教員現役時代のことでした。その上先生がお住まいの千葉市では、歴史愛好家グループ四団体のご指導をされる日々を送られました。本会に入会されてからはその本領を

は別荘を建ててそこで生徒の面倒を見た方が良いと考えたそうです。その別荘が真亀納屋に現存している「史想庵」です。また、歴史研究家でもある先生は、徳川家康の「御成街道」について、数々のご著作を著しています。さらに高村光太郎の研究家でもありました。そこで別荘は九十九里浜の「智恵子抄」詩碑が建っている近辺にと決められたそうです。教員現役時代のことでした。その上先生がお住まいの千葉市では、歴史愛好家グループ四団体のご指導をされる日々を送られました。本会に入会されてからはその本領を



發揮され、会誌「伊和志」の立案と編集長をされ、創刊号から最新号の第三号迄発行されました。さらに本会の活動を広く知らせることと記録することを目的にした「郷土研通信」の企画立案、編集を一手に引き受けられ、会員の士気の発揚を下さったのです。お陰様で第一三号迄続いています。また、年度初めの総会記念講演が毎年開催されていますが、平成三十年度の記念講演は、大網白里市郷土史研究会会長古山豊先生の研究講演「米軍豊海高射砲演習場」が予定されました。そこで先生はこの講演を重視され、会員のみなならず本町内外の人にも知って貰うべきと、「特別講演会」を企画、立案。九十九里町、九十九里町教育委員会に後援を依



### 郷土研究会の活動状況 休止、復活、再休止の一年

令和三年度の郷土研究会の活動は、新型コロナウイルスの感染拡大のために翻弄されてしまいました。そのため役員会がようやく開催できたのが、十月となりました。その後、十一月は本町小関の妙覚寺史跡見学会、十二月は井上隆男先生の講演、一月は染谷佳子、古河達也両会員の発表と順調に進みました。二月の研究會と三月の役員會は、またしてもコロナ感染拡大により中止のやむなきに至りました。

令和三年度九十九里郷土研究会第一回例會が、十一月二十日(土)午後一時三十分から三時まで本町小関岡の妙覚寺で開催されました。例會の内容は当寺が伊能忠敬の生家小関家の菩提寺であり、江戸の文人墨客や当町の文化人の墓碑が多数存在する事からその墓碑の見学会となりました。参加者二十名。案内講師は当會監査の妙覚寺住職河野時巧(じぎょう)師。小関家や伊能忠敬の娘お稻の夫盛右衛門のことを始め対馬出身の学者西山翰海、福島三春の乾坤八(長沼祐達)、この町の藤代昌琢、子安春洋などの墓碑を丁寧に解説して下さり、参加者一同は、文

化の盛んだったことを改めて認識していました。

第二回例會は、十二月十九日(土)、町中央公民館で井上隆男先生の講演「片貝での第二の人生」を開催しました。

先生は明治大学の日本史専攻を卒業され、母校の鎌倉学園に奉職。定年退職後平成七年(一九九五)、片貝に居住されました。以後、現在まで歴史関係の執筆を始めとして多彩な活動をお話し下さいました。今年満九十歳の老後の「第二の人生」は、會員達に深い感銘を与えました。

第三回例會は、一月十五日(土)、町中央公民館で本會會員染谷佳子さんが「本保先生に感謝して『儒学について』、古河達也氏が「はくとう(白濤)



妙覚寺史跡見学会 於同寺本堂前

會と私」を発表しました。古河氏の発表は、戦後の豊海地区青年団の文化活動を扱ったもので、高村光太郎の「智恵子抄」詩碑の建立など、今後のさらなる研究が期待されました。

### 染谷佳子さんが歴史随想集『歴史あれこれ』を出版

さる二月一日(火)、本會會員染谷佳子さんが平成七年から長年書き溜めた歴史に関する随筆をまとめて、『歴史あれこれ』という本を自費出版しました。出版のいきさつが、本書の「はじめに」に記されています。曰く、

俳句誌『つくも』に歴史エッセイを平成七年頃から平成二十六年頃に連載したものを、八十歳の記念に百話ほどを「歴史あれこれ」と題して一冊にした。「御成街道にまつわる話」から「小説「別れ霜」鈴木克久先生の講演を拝聴して」までの百二編には、「九十九里と和算」成



東町の偉人大高善兵衛のこと」や「上総国分寺」「真間の手児奈と山部赤人」など。さらに「島崎藤村と東金」「伊藤左千夫と両親」「芥川龍之介の愛の碑」という文学的内容もあります。全二百九十五頁。表紙の絵と題字、本文中のカットは、染谷さんご自身の作。印刷は郷土研究会で毎度お世話になっている中村印刷です。

### 長谷川ぬいさん、著書『母が語る子守唄 お母さんの昔ばなし』を郷土研究会に寄贈

去る一月十五日(土)九十九里郷土研究会が中央公民館で開催された日、長谷川ぬいさんが実姉内山いつ會長の手を通して著書『母が語る子守唄、お母さんの昔ばなし』を研究会に寄贈して下さいました。長谷川さんは大網白里市四天木の在住。今年八十歳。かつて真亀納屋に住んでいた頃の懐かしい生活の思い出「火吹き竹」「じじみ取り」「ひもとき」「いかけ屋のじいさん」などを書き綴っています。好評です。





頼。会場を町の中央公民館講堂にして開催しました。その反響は大きく満員の来会者から絶賛された事は、記憶に新しいです。

『伊和志』の編集委員会は、「史想庵」を会場にしました。

その近くに私の家がありますので先生の補佐役を私が行うことになりました。令和二(二〇二〇)年から開始した『伊和志』第三号の編集は、会員も高齢になり原稿の進捗も思うようにはかどりませんでした。その間先生は編集会議用に資料を準備され、紆余曲折を経て何とか原稿が用意できたのは、その年の九月頃でしたでしょうか。先生は創刊号と二号もそうでしたが、すべての原稿をご自分で打ち直して編集をされました。その労力たるや筆舌に尽くしがたいものがあります。そうして出来上がった版下を町の中村印刷に提出されました。これも会の予算の少額をお考えになつてのことでした。

その直後、先生は風邪気味の状態から高熱を出されました。

当時新型コロナウイルスの感染が広がってきたこともあり、教え子の医師に診断をして貰ったそうです。結果は陰性でしたが、念のため検査入院を勧められました。そんな中でも先生は、校正を三回もされ、印刷、発行の準備を整えて下さったのでした。お陰で予定された発行期日より早く『伊和志』第三号(前頁四段目の写真)が、会員の手に届きました。

その間、先生の病名が判明して十二月頃十時間に及ぶ大手術を受けました。残念ながら手術後意識が回復せず、薬石効無く翌令和三年三月十四日(日)を以て幽明境を異にされました。

本保先生の偉大にして献身的なる活動のお陰で本会が、大きく発展を遂げることが出来ました。感謝の気持ち捧げ、心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。この後は会員一同、先生の残された二つ、否三つの業績、会誌『伊和志』の発刊、会報「郷土研通信」の発行、研修旅行を

継続して行く事を堅くお約束を致します。

令和四年一月二十六日合掌

## お便りから

本会古参会員染谷佳子氏から本保弘文先生のことを記した寄稿を紹介します。

### 「本保先生に感謝して」

本保先生の突然の訃報に接し、悲しみに打ちひしがれました。郷土研究会会誌『伊和志』の創刊号から編集長として、御熱心に皆の先頭に立たれ御活躍頂きました事に心より感謝申し上げます。私も創刊号と二号の途中までは編集委員として「史想庵」に毎回出席させて頂きました。懐かしさでいっぱいです。私ごとですが、史跡巡りの途中で怪我をして東千葉メディカルセンターに入院してしまいました。その際も先生はお見舞いにいらして下さいました。そして先生は史跡巡りの下見の折には必ずお誘い下さいました。又紅葉の美しい「濃溝の滝」にも

連れて行って下さいました。楽しい思い出がよみがえってまいります。嬉しいことには、拙宅に内山いつ会長さん達と三度ほどお立ち寄り頂きました。

先生は「御成街道」の研究ではその第一人者として、お名前が江湖にひびいています。私はその昔、「房総路」という本保先生の会の機関誌に拙文を出した記憶があります。又千葉日報俳句欄の選者篠崎青童先生の俳誌『つくも』に掲載された拙文二百編ほどをご覧になり、その出版を勧めて下さいました。そして出版の準備について何かとお骨折りを下さっていました。新型コロナウイルスの感染拡大、さらに先生のご逝去により出版は、沙汰止みとなりました。私はお礼を申し上げる事無く、先生は彼岸に旅立たれてしまいました。星空の美しいこの頃です。どうぞ郷土研究会の私共をお見守り下さいますよう。

出逢ひといふ宝集めし天の川

佳子  
合掌



### 中西月華逍遙(4) 月華の親友原安民(川崎安)

齊藤 功

月華(忠吉)が東京薬学校で勉学中、大きな影響を受け後に生涯の親友になった人物が、東京美術学校の生徒であった大磯出身の川崎安(後に結婚して原安民)です。月華が原安民と親友になっていき、如何なる感化を受けたかは、月華の晩年の句集『やっさかど』(昭和二十五年刊)に詳しく述べています。中扉に「原安民の靈前に捧ぐ」と記されていることでその影響が推測できます。

「東京薬学校に入学してから下宿を共にした、大磯、宮代屋(みやだいや、引用者注)の長男、川崎安氏(後、原安民と称す。私より三つ年上)と兄弟の如く交はった。氏は早稲田の政治科から新しく出来た、上野の東京美術学校に入学した。校長は岡倉天心氏。チュウ(鑄、引用者注、以下引用者注の語は省略)金科の第一期生として卒業した。駒込に富士製作所を設け

て、辻新次、浅野総一郎、橋本雅邦氏等の銅像を初

め、伊予大洲公園の中江藤樹先生のドウ(銅)像、大小五十余基を製作、傍ら「日本美術」と云ふ雑誌を出してゐた。私は出京する度に、コマ(駒)込富士見町の宅へ四五日泊るのが例で、其都度美術家達の談をきくを得た。原氏は多芸多能の士で、学生時代から手蹟もよく、テン(篆)刻もやれば俳句や歌も作った。香取秀眞氏等と共に子規先生の友人で、歌会に度々招かれてゐた。ある時私に子規先生の歌を送られた。

丹によし奈良の茶飯の炊きやうを歌人知らず名をなづかしま

み 原氏は子規先生の石コウ(膏)像を作つてハン(頒)布した。夫人原千代子は女子美術出身、点茶、蒔絵、仕舞をやり、俳句は碧梧桐氏を師として学んだ。私は碧梧桐氏が三千里旅行の時、薬の「コロダイ」を作つておくれた。千代子さんは子規

先生が自ら手づくねのネン(粘)土像を作る時も。香取秀眞氏と共に相談に預かつてゐる。原安民と原千代子の名は子規歌集にも出てゐる。

原氏は民友社から本の出る度、必ず送つてよこした。「國民新聞」は一号から又「日本新聞」も送つてよこした。「國民の友」の夏季附録は、当時の文学青年の心をわかした。鷗外の「舞ひめ」、美妙齋の「胡蝶」、露伴の「五重の塔」など、其他硯友社のものも送つてくれた。以下次号。



石規(子規)の石膏像  
作成者 齋藤功  
子規氏夫人 津武  
子規氏夫人 正岡安民  
原安民 塩

\*原千代(子)は、明治十一年神戸の貿易貨物業「大島屋」の長女として生まれた。京都府立高女、女子美術学校を卒業。父方の祖父蘭方医原老柳の家を継ぎ、原氏を名乗った。大島一雄編原千代遺稿集『寒苦鳥』より

### 編集後記

第十三号をお届けします。今年度は当初の計画が大幅な変更を余儀なくされました。

その上、予想もなかった本保弘文先生のご急逝は、私共に衝撃と深い悲しみを与えました。この場をお借りして先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生の創始された「郷土研通信」を受け継ぎ、今回も発行しました。そこで紙面の原板作成を編集のことに熟練されている会員、田井中善夫先生に依頼しました。ご意見などお聞かせ下されば有り難く存じます。

私事ですが、先月愛知県知多半島にお住まいの伊藤明德氏より「干鯛」について、詳しい説明を求められました。「イワシの町」の住民として、郷土研究会の皆さんと漁業の歴史を勉強する大切さを痛感しました。編集は梅花馥郁の早春。発行は、桜花爛漫の好時節。

(齊藤 功)